

—檜原村の檜原城跡— (3)

(記 岡本)

2018年10月、武蔵五日市駅からバスに乗車し、檜原村の本宿(もとじゆく)役場前で降りて檜原城山に登った。更に千足から天狗、綾の両滝をみて馬頭刈尾根方面を踏破したことがある。我々の年配者にはどうも城塞愛好家が多いようである。何か浪漫を感じるのであろう。同類の端くれよろしく城跡をつぶさに観察するとともに城をめぐる歴史を知ろうと城山に登った。

バス停近くの南秋川に架かる橋を渡った先に吉祥寺があり、本堂の左手より登る。釈迦如来、文殊菩薩など次々に現れる十三仏を拝し、50分程で城跡(主郭跡)のある城山山頂に着いた。期待した石垣は見当たらず約30m四方の平坦地である。大木の幹に手製の貧弱な山名版「檜原城山449m」が掛かっており、反対側に城跡に関する説明板が立っている。主郭南側に浅い堀切りがあり、その先に小規模の曲輪(郭)がある。曲輪の周囲は急角度で落ちており、戦闘に備えた山城躍如たるものを感知した。



まずは主郭跡に立つ東京都指定史跡檜原城跡の説明板(平成3年3月東京都教育委員会作成)の要旨はこうである。「檜原城の築城、城主などについて不明の所が多いが、少なくとも戦国期の後北条氏時代後半に戦略上の必要から築城された。天正18年(1590年)豊臣・徳川両軍の関東侵攻の折には、後北条氏の支城として機能していたが、同年7月12日両軍に攻められ落城、以後廃城となった。城跡は、主郭を中心に南と北に伸びる小規模な郭からなる。郭は細い土橋で接続され、南に伸びた尾根には数本の堅堀が設けられていた。都内に現存する中世城郭のうち戦国初期の構造をよく残しており価値は高い。」



お硬い教育委員会の説明は、築城者や時期について不明の所が多いと言及を全く避けている。「不明」としてしまっただけは、浪漫や面白みがない。不明なりに興味深く説明すべきであろう。例えば「諸説あり」として、種々説明してはどうだろうか。蛇足ながら触れると、中央での政争に敗れた藤原氏と並ぶ名家橘氏の、末流の末流が流れてきて檜原に住みついた橘高安という説(信憑性は極めて低い)だとか、吉祥寺の梵鐘の銘文に平山末重とあ

ること等から平山末重説があるという。

参考資料として読んだ「檜原紀聞」(昭和52年刊)の著者が城跡を訪れた際、著者が見た説明板には、築城の経緯が説明されていたという。著者が訪れたのは昭和52年以前なので都の説明

板は無かったはずである。説明文の主は、檜原村の下元郷出身で郷土史家であり東京地検検事であった小泉某氏である。その要旨は次のとおりである。

「応永(1394~1428)の昔、足利第4代の管領持氏が執事上杉氏と確執して天下の兵を動かした時、武田氏が甲州塩山に居て大菩薩、檜原線から関東に出没して鎌倉を威嚇するところから、平山武者所季重の後裔平山三河守正泰を起用して此処に城を築かせた。爾後子孫はこれに居り、後代小田原北条に隨身して、甲州の境目の守りに任じた……」



15世紀初頭に平山正泰が築城、整備し、西からの侵攻勢力に備えた。その後、北条早雲から3代氏康の頃、小田原の後北条氏が勢力を伸ばしてきたので16世紀半ば天文(1532~1555)年間に平山氏は後北条氏に従うことになり、檜原城は八王子城の支城として働く。天正(1573~1590)年間に平山氏重が檜原城主となり、郷土と共に小河内、西原方面に出陣して甲州からの勢力、賊徒を排除し成果を上げていった。豊

臣の時代となり、関東にその勢力が伸びてくる。前田利家、上杉景勝の豊臣軍により、北条氏照の守る八王子城が天正18年(1590)6月23日に落城し、次いで同年7月12日多勢に無勢で平山氏重も敗れ檜原城は落城した。小田原城落城と同じ日である。以上が概略である。

ところで、落城については信頼できる資料がなく、このことから落城について二つの説がある。一つは、檜原城主の平山氏重は6月23日の八王子城落城の悲報を聞き、一人責めを負って自刃し、家臣や住民を戦渦から守ったというものである。他の一つは、6月22日八王子城の城代家老の横地監物が檜原城に落ち延びてきて、氏重と力を合わせて豊臣軍と一戦を交えたが敗れ、平山氏重は千足で討ち死にし、横地は落ち延びて小河内近くで自害したというものである。千足に氏重を祀った御霊檜原神社がある。

氏重の跡継ぎである平山氏久については、八王子城を脱してきた横地監物と共に後図を策して浅間尾根を西に逃げた。だが、横地は小河内で自刃し、茗荷平で横地と別れた氏久は名を変え、その後も檜原に隠れ住んでいたとも言われている。

紹介できなかったが、檜原城落城に絡んだ伝説や物語の類は幾つもある。浪漫、浪~漫。次回は本宿について触れる。

(了)